

## 「相対を越えて」

人間は相対の世界、すなわち二項対立や二元論、相反するもの、自分のほかに他者を設けるなど自分の存在や生き方を明確にするために、この概念を前提として自身の存在の場所、関係、在り方を確認してきた。そこには絶対的な自己は無く、他との関係において自分がこの世界に生きている架空の意味を見いだしているにすぎない。現実には人間の存在は私たちが有意識で認識している世界観とは全く異にしている。認識を超えて、絶対なるリアリティがすべての存在の中心としてあることを知覚しながら常にそれを体験してきたことを、今日まで人間は忘却し続けてきた。この世界の相対性を基本に作られた例えば、制度を始めとする物質的“生”への執着が増大することによって、その絶対なるリアリティを意識の外に放り投げてきた。現実のこの世界の変化が、二項対立もしくは二元論、すなわち相対の世界の解釈を超えた様々な現象が露になってくることによって、その絶対的リアリティを知覚せずに存在の意味を理解することが不可能になってきている。自己が信じるリアリティはこの相対の世界で普遍性を持たないとしても、忘却の彼方から知覚する本質的な存在への道標として、絶対なるリアリティに沿ってひとりひとりが生きていくことを必然として捉えることになる。あるべき人間の制度すなわち相対の世界を超えた絶対なるリアリティのなかに自己を見出し、現在そこへ帰ることが可能となる時代を私たちは迎えている。そして今、ここにいることの意味は相対を越えて存在している。

2011年7月 平川典俊